

令和元年6月19日現在

機関番号：82620

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K16971

研究課題名（和文）アイヌと和人の文化交渉史に関する研究 明治期の和人によるイナウ奉納習俗を中心に

研究課題名（英文）Research on the History of Cultural Contacts between the Ainu and Wajin,  
Focusing on the Meiji Period Wajin Custom of Offering Inau to Gods

研究代表者

今石 みぎわ (Imaishi, Migiwa)

独立行政法人国立文化財機構東京文化財研究所・無形文化遺産部・主任研究員

研究者番号：80609818

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は明治期に和人によって本州の社寺に奉納されたアイヌ民族の祭具・イナウの研究を核に、近世後期から近代におけるアイヌと和人の文化交渉史を再考することを目的とする。

奉納イナウの製作地（入手先）は、その形態的特徴からみて北海道・樺太の広い範囲に及んでおり、このことはイナウ奉納習俗が海上信仰のひとつの形態として、ある程度の広がりを持って和人船主に受け入れられていたことを示している。またこうした信仰が成り立つ背景には北前船交易や漁場経営のための和人の北方進出、和人とアイヌの信仰・儀礼の親和性、両者の文化が併存する社会状況等があったことが示され、両者の文化交渉の具体的な在り方の一端が明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

イナウ奉納はアイヌと和人間の文化伝播と習合の一事例と位置づけられ、今後、イナウの類似祭具である本州の削りかけ状祭具との関わりを再検証する上で重要である。さらに、これまで積極的に取り上げられることのなかった、北から南（アイヌから和人）への文化伝播の様相が本研究により具体的に明らかにされたことは、アイヌと和人の関わりのある方を再考し、列島上を交差する文化の道の多様性を見直す際にも、大きな意義を持つものとする。

研究成果の概要（英文）： This research aims to reexamine the cultural contacts between Wajin and the Ainu from the end of Edo to modern era by studying Inau, or an Ainu wooden instrument used for rituals, which Wajin dedicated to shrines and temples of Japan's main island in Meiji era.

Through analyzing figures (patterns/ designs) of dedicated Inau, it becomes clear that Wajin obtained Inau from the Ainu living in extensive areas from Hokkaido to Sakhalin. This fact indicates that the then Wajin ship owners, to a certain extent, recognized the custom of offering Inau as an established ritual of marine traffic. In addition, studying the historical materials reveals the background that contributed to the establishment of the custom; Wajin's advance into northern areas through Kitamae-bune Trade and the fishery operation, high affinity between Wajin and the Ainu beliefs and rituals, and the social conditions that allow coexistence of both the Ainu and Wajin culture.

研究分野：民俗学

キーワード：アイヌ文化史 イナウ 北前船交易

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

2015年2月～5月にかけて、北前船交易の拠点として栄えた石川県の2ヶ所の港町で、アイヌの木製祭具であるイナウ計9本が、額に納められて神社に奉納されているのが(再)発見された。予備調査により、これらは北前船船主らによって明治初期に北海道から持ち帰られた、国内最古級のイナウ資料であることが判明した。本州以南の社寺に奉納されたイナウの例は、これまでも青森・岩手などで確認されているが、これらは従来、来歴不明とされてきた。しかし石川県での発見により、これらも同一背景を持つ資料であり、イナウを社寺に奉納する習俗が本州以南で一定の地域的広がりを持って展開していた可能性が出てきた。

### 2. 研究の目的

本研究は、石川県で発見された明治期の奉納イナウおよび国内の類似資料の調査研究を核に、近世後期から近代における、アイヌ民族と和人(本州以南の人々)の文化交渉史を再考することを目的とする。イナウはアイヌが最も重要視する祭具である。それがなぜ和人によって本州の社寺に奉納されたのか、その経緯・背景を現地調査や関連資料の分析によって解明することにより、日本列島におけるイナウ関連習俗の全体像を追究すること、さらには、その過程を通して、北前船交易等を介したアイヌと和人の文化交渉や、和人によるアイヌ文化受容の実態を検証・考察することで、従来の研究では見落とされてきた「北からの文化の道」を実証的に提示することを目指す。

### 3. 研究の方法

- (1) 奉納イナウの物的調査 形態分析や樹種同定により特徴を明らかにし、製作地・製作年代を検討する。
- (2) イナウ奉納習俗の歴史社会的・文化的背景の調査 奉納額所在地において、現地調査と関連資料の収集・整理・分析を行い、イナウ奉納習俗の歴史的、社会的背景を考察する。また、イナウ奉納習俗に関連が深いと考えられる本州以南の海上信仰習俗について、現地調査・資料調査を進め、これらとイナウ奉納習俗との関連を探る。
- (3) 類似資料の所在調査を始めとする現地調査 イナウ奉納習俗の展開や広がりを把握するため、青森県深浦町円覚寺の奉納イナウ(27点)、岩手県大船渡町の奉納イナウ(1点)をはじめ、類似資料の現地調査や所在調査を行う。
- (4) アイヌ関連資料の再検証 アイヌ関連の先行研究・文献資料を、文化交渉という観点から再検証する。具体的にはイナウを用いるアイヌの儀礼を、本州のイナウ奉納習俗との比較の視点で読み直すこと。アイヌと和人の文化交渉の実態を示すその他の事象を抽出することの2点に焦点を当てて行う。

以上を踏まえ、イナウ奉納習俗の本州以南における時代的・空間的広がり、展開について分析する。また奉納者がどこで、どのようにしてイナウを入手し、なぜ持ち帰って奉納したのか、その歴史社会的・文化的背景を当時の交易・交通網や、海上信仰習俗等との関わり中で考察する。これにより、和人によるアイヌ文化受容の実態解明を目指す。

### 4. 研究成果

奉納イナウの産地は、奉納額に「ヨイチ場所産」(余市町)と明記してある一点以外については不明であり、奉納年代についても、奉納額がある石川県のイナウ(明治元年～明治23年)以外については不明であった。そこで奉納イナウの製作地や製作年を検討すべく、研究協力者の北原モコトウナシ氏(北海道大学アイヌ・先住民研究センター)を中心にイナウの形態的特徴を分析した。

その結果、イナウの形式は樺太および北海道アイヌのもので、北海道内では石狩川流域、北部地域、東部地域、道南地域など広い地域が想定されることがわかった。また研究協力者の堀井美里氏(合同会社 AMANE)による史料分析から、樺太式イナウを奉納した石川県輪島市黒島の角海家が、奉納年の前後に実際にサハリン東海岸の名寄に出航していたことが判明し、角海家奉納のイナウが名寄にて入手されたものである可能性が高まった。

イナウの奉納年代については新たな発見はなかったが、円覚寺の奉納イナウの中には、その形態的特徴や素材が石川県の奉納イナウに酷似するものが含まれており、石川県のイナウと近い産地や奉納年代(明治初期)のイナウである可能性が考えられた。

以上のようにイナウが北海道・樺太の広範囲で入手されたものであることや、27点ものイナウが奉納された青森県円覚寺が北前船交易における海上信仰の拠点であったことを鑑みれば、イナウ奉納には日本海ルートを航行する船が多数関わっていたと考えるのが自然である。つまりイナウ奉納が海上信仰の一形態として、一定の時間的・地域的広がりをもって和人船主に受け入れられていた可能性が指摘できる。

ではなぜ、どのようにして和人はイナウを入手し、奉納したのだろうか。その歴史的背景については、堀井美里氏や濱岡伸也氏(石川県立歴史博物館)などの研究協力者を中心に史料分

析を行った。その結果、廻船業を通じた地縁関係を基盤にしながら北方へ進出し、次第に漁業経営に参画していった輪島市黒島の角海家や七野家、幕末から「北ルート」(大坂へ立ち寄り、奥羽・蝦夷地と蝦夷を直結するルート)による交易を積極的に行なった美川町の加登屋など、幕末～明治にかけての能登半島の船主による北方交易や、漁場経営の実態が明らかとなった。特に角海家文書の分析によってイナウの入手先の具体的地名(樺太東海岸の名寄)が特定されたことは大きな成果であり、今後イナウ奉納の歴史的背景や文化交渉の在り方の検証をさらに進めていくうえでの重要な足掛かりとなるはずである。

また、イナウ奉納の文化的背景については、アイヌと和人の信仰や儀礼における親和性の高さや、両文化の併存・融合状態があったことが指摘された。たとえば研究協力者の谷本晃久氏は、幕末の蝦夷地で社会や文化の併存・交渉状態があり、(奉納イナウのひとつの産地である)ヨイチ場所では和人の年中行事のなかにアイヌの儀礼が組み込まれており、その儀礼の中でアイヌから和人にイナウが「差出」されたり「持参」されていたことを指摘している。

一方、和人の船に関わる信仰のなかでは、イナウに酷似する削りかけ状祭具や、削りかけから派生したとされる御幣が用いられることがあり、こうした習俗とイナウ奉納に関わりがあった可能性も指摘された。たとえば船絵馬のなかでも幕末～明治初期にかけて広まったとされる「難船絵馬」は、ご神助のしるしとして「御幣」が描かれるのが定型表現であり、そこに御幣に対する特別な思いを見てとることができる。また、三陸地方で「削りかけ」と呼ばれる焚き付けを海に投じて安全を祈る風習は、アイヌが海上の難所を航行する際にイナウを海に投じて祈る風習と非常に親和性が高い。実際に近世蝦夷地を旅した紀行家松浦武四郎などは、各地でアイヌによるイナウ奉納を目撃し、自らもこれを作らせて奉納している。御幣を彷彿とさせるイナウという祭具そのものも、これを神に奉じる風習も、和人にとってはきわめて馴染みやすいものであったということがわかるのである。

以上のように、イナウ奉納という習俗は幕末から明治にかけて慣行された海上信仰のひとつの形態であり、その背景には北前船交易や漁場経営による和人の北方進出、また和人とアイヌの信仰・儀礼における親和性や、両者の文化的交流があったと考えられる

## 5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計2件)

今石みぎわ「本州の社寺に奉納されたアイヌの祭具・イナウをめぐって」『石川の歴史遺産セミナー講演録』石川県立歴史博物館、査読無、2018、pp.14-25

今石みぎわ「本州の社寺に奉納された明治期のイナウについて」『民具マンスリー』49巻12号、神奈川大学日本常民文化研究所、査読無、2017、pp.1-10

[学会発表](計1件)

今石みぎわ「明治期の奉納イナウにみる和人とアイヌの文化交渉について」日本民俗学会第68回年会、千葉商科大学、2016

[図書](計2件)

今石みぎわ編 2019『海を渡ったイナウ アイヌと和人の文化交渉史の研究』東京文化財研究所 169頁

所蔵論文:

今石みぎわ「本州の社寺に奉納された明治期のイナウ 石川県の奉納イナウを中心に」

北原モコトウナシ「奉納イナウの形態と特徴」

堀井美里「石川県輪島市門前町黒島の廻船船主と北方進出」

濱岡伸也「加賀藩産物方御用船 威徳丸の「航跡」」

谷本晃久「近世文書の中のイナウ アイヌと和人の交渉史から考える」

戸潤幹夫「イナウ奉納額の周辺と絵馬文化 輪島市若宮八幡神社の遺例を中心に」

今石みぎわ「海上信仰における幣、削りかけ、イナウをめぐって」

大井理恵「イナウ奉納額の保存修復について」

IMAISHI Migiwa, KITAHARA Jirota, *Hana to Inau-Ainu Culture in the World*, Hokkaido University Center for Ainu and Indigenous Studies, 2018, pp.113

[その他]

今石みぎわ(エッセー)「海の道とイナウ」『まほら』旅の文化研究所、2018、pp.38-39

今石みぎわ(招待講演)「イナウ・削りかけ状祭具の分布状況調査から」

シシリムカ文化大学第5回講座「イナウから探る～人・文化・信仰の交流～」平取町、2017

今石みぎわ(招待講演)「本州の社寺に奉納されたアイヌの祭具・イナウをめぐって」

第27回石川の歴史遺産セミナー「北前船と蝦夷地」石川県立歴史博物館、2017

今石みぎわ(招待講演)「海の道によって運ばれたアイヌ文化 若宮八幡神社の奉納イナウをめぐって」講座「資料が語る北前船主の歴史」輪島市教育委員会、2017

## 6 . 研究組織

### (1)研究分担者

#### (2)研究協力者

研究協力者氏名：大井 理恵

ローマ字氏名：(Ooi, Rie)

研究協力者氏名：北原 モコットウナシ

ローマ字氏名：(KITAHARA, Mokottunas)

研究協力者氏名：谷本 晃久

ローマ字氏名：(TANIMOTO, Akihisa)

研究協力者氏名：戸潤 幹夫

ローマ字氏名：(TOMA, Mikio)

研究協力者氏名：濱岡 伸也

ローマ字氏名：(HAMAOKA, Nobuya)

研究協力者氏名：堀井 美里

ローマ字氏名：(HORII, Misato)

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。